

# 活動報告書

報告者氏名: 笠島真須美 所属: 福井県立福井東特別支援学校 記録日: 27年2月27日

## 【対象児の情報】

- 学年 小学部6年生
- 障害名 低酸素脳症 難治性痙攣
- 障害と困難の内容 気管切開、酸素使用、夜間人工呼吸器装着、胃瘻、気管部及び口腔・鼻腔からのたんの吸引が頻回の重度重複障害児。音や光への反応はあるが、見ることは弱く、音や物を認知して見聞きすることは困難。意図的な動きはほとんどなく、やり取りに使えるような動きとして、瞬き、眼球の動き、まれに上がる左手、前後に動く舌がある。

## 【活動目的】

- 当初のねらい 重度重複障害児への外界への気づきを高めるための指導
- 実施期間 平成24年7月～
- 実施者 笠島 真須美
- 実施者と対象児の関係 担任

## 【活動内容と対象児の変化】

### • 対象児の事前の状況

平成24年に本児の担任になったとき、本児のような最重度児にとっての主体的な活動はどこに表れるのだろうと考えた。ちょうどそのころ、本児には瞬きが出てきていたので、そこに働き掛けると、瞬きを意図的に使えるようになるかもしれないと考えた。そこで、24年7月に購入したiPadを瞬きで操作できないかと考え、まぶたにスイッチを貼りiPadタッチャーに接続して教師と一緒にiPadを楽しむ活動を始めた。しかし、瞬きは増えたものの、スイッチ操作は確実ではなく、意図的な瞬きが増えたとはいえなかった。

そこで、本児にとっての主体的な活動とは何かと再度考え直した。本児にとっては、外界からの刺激に気づき受け止め、受け止めたものを、「見えたよ、聞こえたよ」と反応することが主体的な活動ではないかと考えた。

そのための取組として、本児が気づきやすいものは何か実態把握をやり直し、さらに気づいたことにどのように反応しているのか全身観察をやり直した。

### • 活動の具体的内容

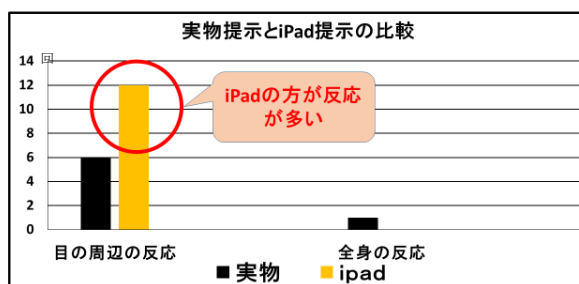
実態把握では、実物の鈴とiPadで表示した鈴で、「a 見せるだけ」「b 音を聞かせるだけ」、「a+b」「a+b+教師の声掛け」、ということを6回比較した。そのときのビデオから、目の周りの反応を、「目が開いたか、目を動かしたか、パチパチした瞬きか、パチンとした瞬きか」という種類別に集計した。同時に、「吐息、腕があがったか、口や眉間の周辺の動きがあったか、その他足や全身の動きがなかったか」も観察し集計した。

### • 結果と教師の予想

初めに、実物提示とiPad提示ではiPadの方が反応が多かった(グラフ1)。このことから、本児はiPadの音や光などは気づきやすいのではないかと予想した。

次に、提示する刺激の違いでの反応を比較すると、「見る聞く同時」「教師が声掛けしながら」の方が反応が多かった(グラフ2)。このことから、かかわる際には、単一の刺激だけで

グラフ1「実物とiPadでの比較」



なく、複数組み合わせたり、教師が声掛けしながらかわったりすることで、より気づきやすく、その興味が持続され反応が増えるのではないかと予想した。

最後に、教師が声掛けしないときと、するときで目の反応の種類を比較した。「目が開く」「目の動き」「細かい瞬き」には顕著な差はないが、「パチンとしたしっかりした瞬き」だけは、3回の差が現れた（グラフ3）。パチンとした瞬きは教師がかかると多く出ることから、他の目の動きやパチパチした瞬きとパチンとした瞬きとは違うものとして考えてもよいのではないかと予想した。

### ・実態把握を受けて活動の修正

こうした結果から、活動を修正した。まず、光・音・動きのアプリを、本児がスイッチ操作することをねらうのではなく、教師と一緒に操作している画面を楽しみ、教師とのやり取りを意識することをねらうようにした。

次に、iPad への反応が多かったことを受けて、物への気づきを高めるために、いろいろな活動中、実物提示と合わせて、iPad でも写真を撮って見せるようにした。

### ・活動の様子 ～物への気づきを高めるために iPad と実物を交互に提示する取組から～

例えば、11月ごろ校外で焼き芋を買ったとき、初めに焼き芋を声掛けしながら提示すると、パチと瞬きをした。その後、iPad で芋を写真に撮り右から左へと動かすと、パチパチと瞬きし、さらに首を動かし、再びパチパチと瞬きをした。最後、再び芋に戻り、手で触れさせられるとパチと瞬きし、腕に力を入れ押し返すように動かした（図1）。また、学校に帰ってから、同じような手順で焼き芋と iPad を提示したところ、実物のときには細かいパチパチした瞬きだけだったが、iPad で見せると、パチンとしっかりしたまばたきを見せ、芋を追視しその後パチパチとした瞬きをした。

### ・対象児の変容

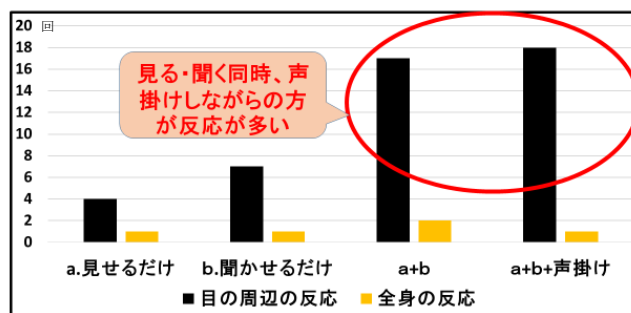
iPad は平成24年7月から学習活動に取り入れたが、2年半にわたる取組で、多くの人から、「瞬きが多くなった」「目がよく動くようになった」と言われるようになった。また、2年ぶりの盲学校の見え方相談で、視力がわずかながらも上がっていること、目の動きがよくなっていることが指摘され、「本児は、物を見ようと意識してきている」という評価を受けた。

### 【報告者の気づきとエビデンス】

#### ・主観的気づき

本児の目の動きや瞬きは反射ではなく、反応であり、教師の働き掛けや提示されたものに対して意識し気づいている反応ではないか。

グラフ2「刺激の違いによる比較」



グラフ3「教師の声掛けによる目の周辺の反応の違い」

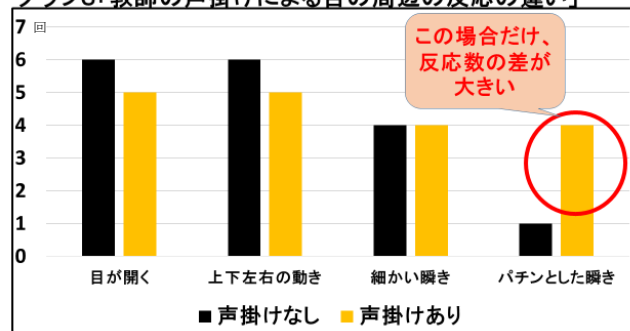


図1 物への気づきを高める取組



## ・エビデンス(具体的数値など)

本児とフレンチトーストを作った時、最初に実物の卵を見せ、次に iPad で卵を見せた。頭の前に iPad を置いたら目が大きくなり、上向きになった (図 2)。また、左へと動かしていると左目が左側に動き、iPad を外すと左目が細くなり左側へと追う様に動いた。本児の場合、動くものを追視したり、ある程度の時間教師のかかわりに応じて目が動いたり瞬きしたりしているので、これらの目の動きは反射ではなく、「何かおきてる?」という思いの表れであると考え。本児には、このように追視が生まれてきていて、その目の動きは外界のものを「何かおきた、何だろう」と意識し、取り込もうとしている主体的な気持ちの反応ではないかと考える。

図 2 卵を実物と iPad の映像とで見つめる様子



## ・実践を振り返って

今回の実践を振り返ると次のようなことを学ぶことができた。

- 主体的な活動のとらえ方の変容に伴う目標の修正

図 3 主体的な活動の捉え方の変容に伴う目標の修正

身体の一部を動かし、iPad や物を操作する



外界の変化 (iPad や物など) に気づき、気づいたということを身体で表現すること

操作することから開放され、自由な発想が産まれた。

とって次の段階へ進むさらに主体的な活動だと考えた。だからこそ、瞬きしたり、目を大きくしたり、目を閉じてしまったりすることは、本児が変化に気づき、「えっ? なにかおきた、何だろう?」と考えている活動の表現であり、反対に時には「もういいや、これはいらない」と判断したことの表現が目や目を閉じることではないかと考えるようになった。そうした考えになったとき、iPad を操作できなくてもいい、というように考え操作に固執しない自由な楽しみ方ができるようになった。

- 子どもの成長と、それを促したかかわり

図 4 本実践を通して見られた子どもの成長とそれを促したかかわり



ぼんやりと霧の中



気づきやすく  
反応しやすい  
方法で

子どもの行動には  
全て意味がある  
とって



少し霧が晴れてきた

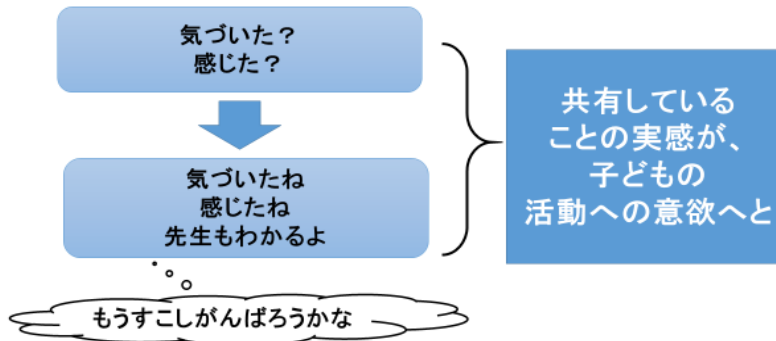
普段の本児は図 4 の左写真のようなぼんやりした表情だが、教師が本児の気づきやすい方法、本児の一番反応しやすい方法を探し、そこにかかわったことで、右の写真のような真剣な表情を見せるようになった。ようやく、本児は外界に対する霧のようなものが少し薄れ、何か、見てみようかな、どうしようかな、と考える段階に成長してきたと考える。それは、本児の目の動きに追視が生じてきていること、一定の

時間 (それは数分に満たないものではあるが) 教師とやり取りができていることからいえる。今までは、本児

の瞬きや目の動きを、気づいているのかな？見ているのかな？感じているのかな？と漠然と思いかかわってきたことが、今回改めて実態把握をしながらビデオを分析したことで、これらの反応を気づき、感じていることの表出として解釈することができた。また、こうしたことに気づけたのも、普段のかかわりにおいて「子どもの行動にはすべて意味がある」と思い、瞬きや目の動きを反射としてとらえるのではなく、意味ある行動として丁寧にかかわってきたことで、気づきへの第一歩が生まれ、次への検証へとつながったと再確認した。

➤ 子供に届いているかを確認し共有すること

図5 子どもに届いているかを確認し共有すること



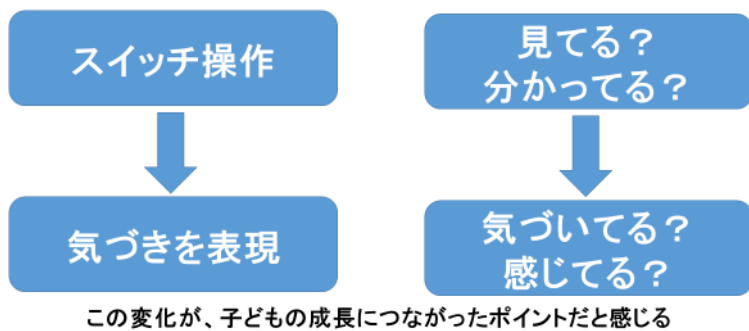
さらに物を挟んで子どもと教師が一緒に活動しているときに、まず、活動や物が子どもにきちんと届いているかどうか検討し、子どもに届く方法で伝えた場合、子どもと活動をしっかり共有することができることを再確認した。さらにそのときに、伝わるやり方で声掛けしかかわると、子どもが応じてくれてやり取りが成立し、こんなに重度の子でも活動や物に対して、もう少し見てみよう、もう少し

教師に応じてみようという気持ちになることも再確認した。

➤ 客観的な視点での捉えなおし

最後にもう一つ、今回ビデオに撮って細かく確認することを通し、自分たちの気づきや予想がただの思い込みに陥らないように、客観的に見直し活動を修正することの大切さも確認した。今回の場合、最初に iPad をスイッチ操作することが本児の発達段階にあっていないことに気付いた時点で活動を修正した。また、本児の瞬きを分かっている、見ていることへの反応としてではなく、気づいている、感じていることへの反応であると捉えなおしたことも、大事な気づきであった。iPad は本児の場合、見る、聞くという点において

図6 客観的な視点での捉えなおし



実態把握をする点で有効であったと感じている。

今回は、新しい最先端の機器を使いながらも、昔からの古臭いけど語り継がれていたものの大事さを再確認した取組であった。